

語源に見るコミュニケーション概念の本質
—隣人愛との接点—

神門 しのぶ

清泉女学院短期大学

**The Nature of Communication as Revealed by Its
Etymology: Implications of Neighborly Love**

GOTO Shinobu

Seisen Jogakuin College

1. はじめに

現在、「コミュニケーション (communication)」と聞いて多くの人
が最初に思い浮かべる訳語は「伝達」であろう。実際に主要な英和
辞典の一つで確認してみると、第一義として「1 a (思想・情報など
の) 伝達; 通達, 通報 b (熱・感情などの) 伝達; (病気の) 伝染」¹
と出てくる。このように使用される英単語としての意味が、日本語
の代表的な国語辞典である広辞苑の「コミュニケーション」の項に
も記載されている。そこには第一義として、「①社会生活を営む人間

¹ "communication"の項、竹林滋編集代表『新英和大辞典(第六版)』研究社、
2014年、507頁。

の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・記号その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒体とする。」²とある。今日、私たちの社会のあちこちにおいて「コミュニケーション」という名詞は頻繁に目につく単語であると思われるが、それが大雑把には情報伝達や意思疎通という意味で用いられていることは間違いなさそうであり、英単語の訳語としても大きな問題はないと言える。

ところが、communication の語源を探ってみると、上記のイメージには必ずしも現れていない一面が見えてくる。それは何かを先に示しておく、先の英和辞典において、英単語 communication の語義の中では廃語として掲載されている「交わり」、あるいは、動詞 communicate の他動詞として三番目の語義であるところの「分かち合う、共にする」³である。キリスト教の価値観とよく合致するこのようなニュアンスは、ふだんコミュニケーションという言葉が用いられる際はあまり意識されていない部分であろう。しかし、カトリック大学である本学にとっては、とくにコミュニケーションを標榜する学科名を擁していることを思うならば忘れることのできない意味概念ではないだろうか。そこで以下では、コミュニケーションという語について、語源を整理し、英語文献における初出時の意味の検討を行うことを通して、望ましいコミュニケーション概念とはどのようなものであるかを考えてみたい。なお、カタカナで表記される「コミュニケーション」は英単語”communication”に由来するとの前提で考察を進めていくことを最初に断っておく。

2 語源の整理

2-1 英単語 communication の出自

先ほど参照した『新英和大辞典（第六版）』の語源情報を見ると、名詞 communication は、十四世紀頃にフランス語を経由して借り入

² 新村出編『広辞苑（第六版）』岩波書店、2016年、1055頁。

³ ”communicate”の項。現在ではそれは古い語法と見なされることが記されている（『新英和大辞典（第六版）』507頁）。

れられたラテン語 *communicatio* に由来すること、そして、そこから英語の動詞 *communicate* と名詞 *communication* へと派生していったことがわかる。だが、この二つの品詞の発生時期の前後関係までは示されていない。より詳しい歴史的情報を求めて *Oxford English Dictionary* (以下 *OED*) を見てみよう。まず、*communication* の第一義は”The action of communicating or imparting”⁴とある。つまり *communicate* (伝達する) あるいは *impart* (伝える・分け与える) という動詞が成り立たせている行為であるとの説明である。語源についてわかることはおよそ先述のとおりであるが、さらに *OED* には文献初出についての情報がある。

確認される限りにおいて、名詞 *communication* の英語文献における最初の使用例は何か。*OED* によれば、それは宗教改革家ウィクリフ (Wyclif(fe), John 1320/30-1384) が英訳した新約聖書の第二コリント書 9 章 13 節に *comynycacioun* という綴りで見いだされるもので、年代は 1382 年とある。聖書全体の英語訳をはじめて完成させたのはウィクリフとされており、それがラテン語ウルガタ訳聖書からの翻訳であったという事情⁵と合わせると、*communication* という名詞が英語に最初に登場したのは十四世紀であり、それは何らかのキリスト教的概念を指し示すためであった、そしてこの語の前身はラテン語であった、このように考えてよいだろう⁶。ちなみに、動詞 *communicate* の文献初出年代を見てみると、最も早い使用例の年代は、確認されている限り十六世紀のようである⁷。このことから、さしあたり、英語において動詞 *communicate* は名詞 *communication* よ

⁴ ”communication”, J.A. Simpson & E.S.C. Weiner eds., *The Oxford English Dictionary Second Edition*, 3 cham-Creeky, Clarendon Press, 1989, p. 578.

⁵ 「聖書の翻訳：英語」の項、新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典第3巻』研究社、2002年、683頁。

⁶ 先述した語源情報の、ラテン語からフランス語を経由して借り入れられたという経緯について、本稿では検討できなかった。今後の課題としたい。

⁷ *OED*, pp. 577-578.

り遅く生じたものであると見なすことができる。

2-2 英単語 *communication* の忘れられた意味

ラテン語の名詞 *communicatio* を『羅和辞典』で引くと、第一義は「伝達」とある⁸。また、羅英辞典に相当する *Oxford Latin Dictionary* (以下 *OLD*) でも、第一義は『羅和辞典』や *OED* と同様に、“The action of sharing or imparting”⁹と出ている。ということは、本稿冒頭で述べたところの、今日、情報や意思のやりとりといった意味合いで用いられている日本語のコミュニケーションの意味と、ほぼ重なる¹⁰。したがって、ラテン語の *communicatio* は英語の *communication* を経て日本語のコミュニケーションに至るまでの間、言語が整然と置き換わっていただけで、意味には何の欠落もなかったように見えなくもない。だがこの言葉には、「交わり」や「分かち合い」といった、きわめてキリスト教的な概念を色濃く含んで使用されていた過去がたしかにある。そのように主張できる理由は、英和辞典に「交わり」が *communication* の廃れた意味として、「分かち合う」が *communicate* の古い語法として掲載されているからであるが、英単語 *communication* の初出が最初の英訳聖書の中で、パウロ書簡の第二コリント書9章13節の文中に見いだされることはその裏打ちとなろう。では、この語はいったい何を指し示していたのだろうか。いいかえると、この語はどのような意味を持つ言葉として使われ始めたのだろうか。

⁸ 田中秀央編『羅和辞典』2000年(1952年)、水谷智洋編『改訂版羅和辞典』2017年、共に研究社。なお第二義については、前者には「聞き届けること」、後者には修辞学用語として「演説者が聴衆に意見を求めること」とあり、それ以上の語義はどちらにも載っていない。

⁹ 第二義には「基礎の共有」と訳しうる説明があり(“Community of ground.”)、第三義には修辞学用語としての意味が出ている(P.G.W. Glare ed., *Oxford Latin Dictionary*, Oxford Univ. Press, 2006, p. 369.)。

¹⁰ ただし、その行為が *share* であるという *OLD* の説明では、*OED* の *communication* の語義より“助ける”要素が強調されている印象がある。

2-3 英単語 *communication* が最初に担っていた意味

ウィクリフが *comynycacioun* という綴りで英語に持ち込んだ福音的概念の意味を探るにあたり、対応するただ一個のラテン語だけに着目するのではなく、8章と9章の全体で扱われているパウロの主張や論点も視野に入れて考えたい。この二つの章をまとめて扱うことの妥当性は、ある一つのこと——エルサレムの貧しいキリスト者に対する寄付の要請——が、二つの章全体を覆う主題になっている点にある。コリント人への第二の手紙の全13章は、扱われている内容に応じて三つに区切って読むことができるが、その場合、7章までが第一部、8章と9章が第二部、そして10章以降が第三部となる¹¹。

第二部は、「全キリスト者の母教会であるエルサレムの教会の貧しい人々を援助するために、パウロが同地を訪れたとき約束した義援金募集（ガラテヤ2.20参照）のこと」¹²が主題となっている。第二部全体のラテン文の中に、ラテン語の単語 *communicatio* は、*OED*の初出情報にあった9章13節の他に実はもう一箇所出てくる¹³。8章4節である¹⁴。この二箇所について、*communicatio* が表している意味を文脈に沿って取り出してみたい。

まず8章4節から見ていく。ここはパウロがコリントの教会の信徒たちに向けて、エルサレムの教会の貧者たちを救済する義援金の協力を訴えている場面である。別の土地すなわちマケドニアでは、

¹¹ フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書——原文校訂による口語訳パウロ書簡II（一・ニコリント）——』サンパウロ、2008年、165, 211, 221頁。

¹² 同書、211頁。

¹³ *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1994を参照した。

¹⁴ ウィクリフがここを英語でどう置き換えたかは興味深い。ファクシミリ版のウィクリフ訳聖書で確認したところ、*comynynge* という綴りのように読めるが、筆者は古英語の知識を持っていないため、この綴りは正確ではないかもしれない（*The New Testament In English*, trans. by John Wycliffe MCCCLXXXII, revised by John Purvey MCCCLXXXVIII, International Bible Publications, Portland, Oregon, 1986, p. 117）。

信徒たちが、裕福な者もそれほどでない者も自発的に協力を申し出てくれた。その様子をパウロは、3節から4節にかけて、

彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。¹⁵

と紹介する。慈善の業と奉仕に参加させてほしい、と望む彼ら[=マケドニアの信徒たち]の願いを示している箇所と対応する語句を抜き出してみると、”obsecrare nos gratiam et communicationem ministerii”である¹⁶。この部分を直訳するならば、「親切 (gratia) と、奉仕 (ministerium) という性質を持つコムニカチオを、私たち[=パウロたち]に願い出ること」となるだろう¹⁷。

いっぽう、9章13節は次の一文であり、communicatio はその中に見いだされる。

この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。¹⁸

ここでは、直前の8章全体においてパウロがコリントの教会の人びとに宛てて、貧しい人びとへの献金をみずから進んで実践するようくりかえし求めた後に¹⁹、そのような自発的な援助がいかに意義深

¹⁵ 新共同訳。

¹⁶ *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*, p. 1796.

¹⁷ ministerium の属格を「説明の属格」と取った。

¹⁸ 新共同訳。

¹⁹ 8章のラテン文には voluntas (自由意志) という単語が派生語も含めて6

い行為であるかが述べられている。施しを受けた彼ら [=エルサレムの信徒たち] は、あなたがた [=コリントの信徒たち] への感謝として、あなたがたのために祈ってくれるであろうが (14 節)、それは同時に、神を称えることでもある。ここで彼らが神をほめ称える動機をパウロは二つ挙げており、一つはコリントの人びとがキリストの福音を従順に公言していることである。いいかえると、貧者を助ける行為をもって、コリントの人びとが福音に従って生きていることへの称賛である。もう一つは、施しの業が惜しみなく行われている様子への称賛であり、その箇所と対応する語句が、”simplicitas communicationis in illos et in omnes”である²⁰。直訳すると、「彼ら、また、すべての人びとに対するコムニカチオにみられる単純さ (simplicitas)」となるだろう²¹。単純さとは、そのコムニカチオという行為に躊躇や計算高さといったものが混じっていないこと、いわば純粹さのようなものとして解することができる。

これら二箇所の用例にかんして、このコムニカチオに情報伝達や意思伝達という意味を充てて読んだのでは、パウロの真意のこもった文章にならない点に注目したい。試みに、8 章 4 節を「(金品の) 分かち合い」、9 章 13 節を「(善い行いを通じた) 交わり」としてみよう。その場合、8 章 4 節は、親切と、奉仕という性質を持つ (金品の) 分かち合いをマケドニアの信徒たちはパウロに願い出たという趣意になり、また、9 章 13 節は、施しを受けるエルサレムの人びとは、施しを与えるコリントの人びとが、誰に対しても実行する (善い行いを通じた) 交わりが純粹なものであることのゆえに、神をほめ称える、という趣意になる。

つまり、現在では英語名詞 *communication* の廃語や英語動詞 *communicate* の古語とされているような意味こそが、第二コリント書における *communicatio* にはみごとに合うのである。自分の持つて

回出てくる。

²⁰ *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*, p. 1797.

²¹ *communicatio* の属格を「所有の属格」と取った。

いる物を必要とする人に対して、気前よく与えるという行いは、生身の人間にとって決して簡単な行為ではないが、それでもパウロがそれをコリントの人びとに向けて力強く促し、奨励するのは、キリスト者にはイエス・キリストという倣うべき模範があるからである²²。みずからの不利益や不都合を埒外に置いて、助けを必要とする他者のために自分の持っている物を無条件に差し出す行為は、「善いサマリア人」(ルカ 10.25-37) のたとえ話を通じてイエスが人びとに教えようとしたことである。ようするに、ラテン語(ウルガタ訳)の聖書の中の第二コリント書の 8 章と 9 章で使用されている単語 *communicatio* は、パウロがいわば隣人愛の実践に等しい行為を人びとに訴えている場面で使われている単語なのである。

ところが、そのような *communicatio* の含蓄は、既述のとおり、もはや辞典の上では曖昧になってしまっている。言葉は可変的な生き物である人間が使用するものであるから、長らく使用されている間に意味が変化したり消滅したりすることは免れない。とはいえ、この単語の場合はどうであろうか。*communicatio* という語に愛の教えとの接点があるもはやいっさい失われていると考えることは、はたして適当なのだろうか。

3 コミュニケーション概念の十全な理解のために

3-1 ラテン語名詞 *communicatio* の語源

現在、名詞 *communicatio* の辞典上の語義に、キリスト教的な価値観と直接関連させられそうな意味は見当たらないが、この語の語源を調べることで何か手がかりが見つかるかもしれない。*OLD* によれ

²² 「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによってあなたがたが豊かになるためだったのです。この件について、わたしの意見を述べておきます。それがあなたがたの益になるからです」(2 コリ 8.9-10)。新共同訳。

ば、名詞 *communicatio* の元は動詞 *communico* である²³。この動詞の語義は大きく分けて六つある。順に簡潔に記すと、

- 1 To share (共有する)
- 2 To share out (分け合う)
- 3 To associate, unite, link (結びつける)
- 4 To impart, communicate (伝える)
- 5 To discuss together (協議する)
- 6 To bring into common use (誰もが使えるようにする)

である。このうち 1 と 2 と 6 の語義は、おおまかには同じ意味であると見なせるので、

- 1 共有する
- 2 結びつける
- 3 伝える
- 4 協議する

と四つにまとめてみる。すると、これらの動詞は、

- 1 誰かと何かを共有する
- 2 何かと何かを結びつける
- 3 誰かに何かを伝える
- 4 誰かと何かを協議する

のような構造において完成する文章、つまり、人が一人あるいは物が一つでは成立しない行為であるとわかる。このことから連想されるのは、このラテン語の動詞 *communico* が示そうとしている諸行為には、〈ともに、いっしょに〉という姿勢が共通してみられることで

²³ *OLD*, p. 369.

ある。そこで、動詞 **communico** という行為が具現化して生じたものが名詞 **communicatio** の実質であるというように、動詞と名詞の関係を原理的に捉えてみるならば、次のような論理的帰結が得られる。〈ともに〉の姿勢をもって行なわれる行為 **communico** の具現化したものが **communicatio** であるからには、**communicatio** は必然的に〈ともに〉の要素を含むものとして規定されるということである。

このように見てくると、コミュニケーションという日本語は、それが情報伝達や意志疎通といった意味で使われる時にも、話者や使用者の意識とは別に、その行為や行動を支える概念として、〈ともに〉という根本的なありかたを、言葉自体がすでに含意しているという見立てが可能になろう。というのも、言葉の始まりというものに思いを巡らすならば（ヨハネ 1.1）、言葉の根がかんたんに無化するということはとうてい考えられないからである。

3-2 教皇フランシスコのコミュニケーション観

ここまでの考察を教皇フランシスコの言明によって裏付けてみよう。教皇フランシスコは、カトリック教会が定めた「世界広報の日」の第 50 回に際して（2016 年 5 月 1 日）、「コミュニケーションといたくしみ、実り豊かな出会い」をテーマとする教皇メッセージを次のように締めくくっている。

引き裂かれ、分裂し、分極化している世界において、いたくしみをもってコミュニケーションを行うことは、神の子どもたちと人間家族の兄弟姉妹の間に正しく、自由と兄弟愛に満ちた親しさが生じるよう貢献することなのです。²⁴

この部分だけを読むと、コミュニケーションという行為は、いたくしみ——キリスト教色の強い用語に頼らず言うとなれば慈悲や慈

²⁴ <https://www.cbcj.catholic.jp/2016/05/01/7966/>（カトリック中央協議会 HP）最終閲覧日 2022.2.3。

愛²⁵—をもたない状態でも実行しうる行為であるかのようにも受け取れるが、メッセージ全体を読むとそうではないことがわかる。教皇のメッセージには、コミュニケーションという人間の行為の本質は「人の心を開き、孤立させ」ないための働きかけであり、「分かち合うことを意味」するとの認識が明示されている。そして、その働きかけの具体的な実りとして「かけ橋」が築かれること、つまり個人間や諸民族同士の様々に引き裂かれた関係が修復され、「永続的な平和を実現する機会」をもたらしうると述べられている。さらに、分かち合いであるところの真のコミュニケーションが、決して容易に実践できるものではないことも看破されている。それは、コミュニケーションという行為を象徴する動作が、時間をかけて「耳を傾けること」であり、謙虚になって耳を傾けることには何らかの「自己犠牲」が伴うからである。このように説かれる教皇フランシスコのコミュニケーション観は、別の機会においては、一言で「人間的」²⁶と形容されており、人間的なコミュニケーションの基準として「無償性」²⁷が挙げられている。教皇によれば、無償性とは「時間を無駄にすることができるということ」である。教皇フランシスコの提示するコミュニケーションとは、自己犠牲をも孕む困難なものであると同時に、平和という人類普遍の願いをも実現に導きうる、私たち一人一人の行動なのである。

4 おわりに

結論として、本稿では、語源にさかのぼって捉え直したコミュニケーション概念のことを、〈いつくしみをもってなされる物心の共有〉と定義しておきたい。日常的に使用される際に充てられている

²⁵ いずれも教皇メッセージの本文(日本語訳)で使われている単語である。

²⁶ 「本物のコミュニケーションは人間的なのです」(教皇フランシスコ/ドミニク・ヴォルトン『橋をつくるために—現代世界の諸問題をめぐる対話—』戸口民也訳、新教出版社、2019年、171頁)。

²⁷ 同書、177頁。

情報伝達や意思疎通という意味は、情報や気持ちの共有という点で〈物心の共有〉である。それが〈いつくしみをもってなされる〉ものであること、踏み込んで言うならば隣人愛の充溢という動機ないし目的が併記されることによって、この定義は、コミュニケーションという行為本来のすがたを説明しうるものになるだろう。コミュニケーションという言葉がこのような奥行きを有する概念として捉え、意識して用いることは、キリスト教の理念の上に立つ本学にふさわしい心得であると思われる。しかし、それは何もカトリック大学の専売特許ではない。縮小する気配の見えない経済格差の解消や地球環境悪化の改善に〈知〉の共有が欠かせない、そのような今日の世界のありようが求めている、地球市民必携の見識と言えるのではないだろうか。